



## 「第7回日本・ネパール口腔外科学会合同学術会議ならびに 臨床研修」に参加して

松 永 和 秀

近畿大学医学部附属病院 歯科口腔外科

Report of 7<sup>th</sup> Joint Meeting of JSOMS and NAOMS and clinical practice

Kazuhide Matsunaga

Department of Oral and Maxillofacial Surgery, Kindai University Faculty of Medicine

このたび私は、(公社)日本口腔外科学会国際医療協力委員会主催の「第7回日本・ネパール口腔外科学会合同学術会議ならびに臨床研修」(2017年2月2~10日)に国際口腔顎顔面外科専門医(2015年取得)として推薦派遣されましたので、その活動内容を報告いたします。

2017年2月2日夕方大阪・関西空港を出発し、タイを経由し、2月3日夕方ネパール・カトマンズ空港に降り立ちました。日本との時差は3時間15分で、日本と同様、ネパールも1年のうち最も気温の低い季節ということで、夜は若干の肌寒さは感じましたが、日中は20°Cを超え、半袖で過ごせるほどの気候でした。今回、(公社)日本口腔外科学会国際医療協力委員会のもと、日本からは近畿大学、和歌山県立医科大学、北海道大学、大分大学、佐賀大学と全国から7名の口腔外科医が参加しました。

2月4日は日本・ネパール口腔外科学会合同学術会議が開催され、日本から私を含め6演題、ネパールから12演題の臨床に関する口演発表が英語で行われ、活発な討論がなされました(写真1)。わたしは、「Clinical Study of patients with maxillary sinus foreign bodies」(本内容は、Matsunaga K et al, Clinical study of six patients with foreign bodies into maxillary sinus. Acta medica Kindai Univ 42(1): 29-35, 2017に掲載)で口演発表しました(写真2)。合同学術会議で気がついたことは、日本で日常、

英語を使う機会の少ない私たちより、ネパールの口腔外科のドクターらは、遥かに英語が堪能であったということでした。現地のドクターによると、ネパールでは、学生時代に使う医学書で、母国語に訳されたものがとても少なく、ほとんどがオリジナルの英語の医学書で勉強すること、また、大学を卒業すると多くのドクターが海外で研修を積むことが多いこと、などの理由から、英語に堪能なドクターが非常に多いということでした。

2月5日から8日までの4日間、現地の大学病院や総合病院など5施設を訪問し、現地のドクターらと、口唇・口蓋裂や顔面外傷など、共同で手術をする機会に恵まれました(写真3, 4)。ネパールの病院の設備は、日本と比較すると旧式のものが多く、手術器具も決して整っているとは言い難かったです。そこで働く口腔外科医の知識や手術手技は、日本と大きな差はありませんでした。むしろ、ほとんどの口腔外科医たちが海外に留学経験を持ち、新しい治療や手術手技を習得し、母国で活躍したいという情熱に溢れた若い口腔外科医たちが非常に多かったことに、私は一番刺激を受けました。

今回の活動を経験したことで、私自身が、もっと海外にむかって視野を広げ、世界に通用する口腔外科医になるために、常に向上心を持って、成長し続けなければならないと強く感じました。



写真1 合同学術会議の会場風景



写真2 口演発表の中で近畿大学医学部附属病院を紹介（松永：右端）



写真3 現地の大学病院で合同手術に参加（松永：左から2番目）



写真4 手術に参加した日本および現地口腔外科スタッフ（松永：右端）

## 謝 辞

今回の合同学術会議ならびに臨床研修への参加を推薦して下さった近畿大学医学部附属病院 歯科口腔外科 濱田 傑教授ならびに参加に際し、種々ご協力頂きました歯科口腔外科スタッフの皆様に感謝の意を表します。